昔話の一考察

—女性の心の内的成長について（下）—

小野　瑞江

前回は女性の心の内的成長について、昔話「鶴女房」と「天人女房」に語られた「献身」「耐えること」の意味を考察した。今回は残るもう一つの特性「積極的受動」について、「炭焼長者」の昔話で考察する。

3　受身の積極性：「炭焼長者」

＜あらすじ＞塩一升の位の女と竹一本の位の男が、親の定めた約束通り夫婦になる。あらまちの日（大麦の収穫祭）、男は女房が差出す麦飯を「新麦の飯を食えというか」と怒ってお膳ごとけとばす。女房は覚悟を定め、親からもらった家倉のすべてを男に残し、膳と椀だけもらって家を出る。門を出て女は、倉の神様が告げる心も姿も美しい働き者の炭焼五郎の存在を知る。女は五郎を訪ね、自ら嫁にもらって欲しいと頼む。五郎ははじめ断わるが、女に是非にと頼まれ、承諾する。翌日から女房は、夫と炭焼かまどを見てまわって黄金を発見し、たちまち長者になる。

一方竹一本の位のもとの夫は、だんだん貧乏になり、竹細工物を売って歩いて、ある日炭焼五郎の家へやってきた。かつての女房はまだ男の顔を知っていたので、男の品物を高く買ってやる。二度目に訪れた時、男は自分の前の女房であることを知り、舌をかみきって死ぬ。――鹿児島県大島郡

女ははじめ、父親同士の定めた約束に従い男と結婚している。定められた運命に対して当然のごとく受身で従順な態度である。結婚後も塩一升の位の女房が、竹一本の位の男につかえるのに、決して傲慢ではない。あらまちの祭日、女は「一俵の麦を一年になるまで、一斗の麦は一升になるまで搗いて炊いた飯です。今日はあらまちの祝いですから、どうかこれを食べて下さい」と差し出す。女が竹一本の位の夫を盛りたて、一生懸命つくした様子からうかがえる。それだけでなく、舅、姑に苛められたと語られる類話もあり（福島県南会津郡）、嫁として舅、姑にもつかえねばならなかったであろう。ここまでの女は、1、2節の女たちに共通する、献身し、耐え、受入れるという行為を通して、母性の発展という内的な仕事をやり遂げている。

一方男はどのように語られているだろうか。夫は怠け者で神信心なぞしないという（石川県小松市）。その上吝嗇で下女下男の使いがあらい（山梨県西八代郡）。それゆえ夫を盛り立てようとする女房の配慮も、夫には弟子どもにまでなに不自由ないよう銭金を与える困り者（岩手県遠野市）、としかうつらない。遂に夫は、使いが荒いこの女房をおいてはとても富貴にはなれぬ、と家を追い出すのである。この種の類話と、冒頭の昔話のように、自ら夫のもとを去ったと語られるものとは、およそ同数に及ぶ。男に追い出されるにしろ、自ら出ていくにしろ、女は自分の行為のいいわけもしなければ、その正しさを主張して男と敵対することもしない。黙って出ていくのである。女性が猛々しい男性に直接的に対することは、好ましいあり方ではないようである。プシケが葦によって諭されたのもまさにそのことであった。つまりアフロディーティーがプシケーに課した仕事は、「輝く黄金の羊」の毛を一房集めることであった。すべてを焼き

つくす、男性の破壊的な力のシンボルである太陽の雄羊から毛を一房集めるなど、プシケーにはとてもできそうもない。仕事の困難さを悲嘆して身投げしようとしていたプシケーは、河の中の葦によって助けられる。「お待ちになって。がまんしなさい。そのうちにことがわかりましょう。時がたてばいい知恵が湧いてくるでしょう。日は常に高いとは限りません。そして男性性もまたつねに強烈であるとは限りません。ひとはその力に逆らってはならないのです」と葦はささやいた。このようにして男性と女性がお互いにすさまじい敵意を持って向かいあう事態は避けられるのである。

さて男のもとを去った女はどうするか。女は既に1節（「鶴女房」）並びに2節（「天人女房」）で、女性の課題（献身並びに耐えること）をやりとげ、男性機能の統合をなしつつあった。それゆえ極めてしなやかに強くなりつつある女は、援助を求めて父母のもとへ戻ったりはしない。女が男との真に実り豊かな関係をもつようになるには、本能の声を聞けばよい。

女は倉に寝て倉の神様の声を聞き、炭焼五郎の存在を知る。炭焼五郎といえば「世の中のナラン者（貧困者）」ではあるが、「心も美しく、姿も美しい働き者」であるという。その炭焼男は、「見ろう様もない簾戸の家」に住む貧之者であった。ところが訪れた女は少しも驚かない。それは女が、貧乏な男の外見にとらわれず、その本質を見抜く力を持っていたからであるともいえる。女は妻にして欲しいと男に頼む。男の方が立派な姿の女に驚いて「フトフト震え」たという。男は「あなたはこの世ん中にふたりとないりっぱな女である。私などのような者の妻にはとてもふさわしからん」と断わる。外見において男と女は大変な身分の相違があったようである。女は繰り返し「私の望みだからぜひ」と頼み、とうとう承諾させてしまう。

女房になった翌日から女は非常に能動的となる。男の炭かまどを見て廻り、たくさんの黄金を発見する。その黄金は男自身に気づかれていなかったものである。それどころか価値のないものとして見捨てられてさえいたも

のであった。ここで示した女の能動性は、どこまでも相手に添い、相手の能力を引き出すという意味で、受身の積極性ともいえるものであろう。玉谷直美は女性の自己実現のあり方について、「女性は直接的な自我の要求に一度は目を閉じ、つねに相手のことを考えながら行動するという自我否定を媒介とした自我の肯定の強さが必要だ」と述べる。まさに炭焼女房のあり方もそのようなものであった。そこのことが二人の結婚をして黄金で象徴される幸福へと導いたといえよう。

昔話はここで終わらず、女が以前に別れた夫について語られる。本節の冒頭で掲げた昔話は、貧乏になった別れた夫が、自分が以前別れた女房に助けられたことを知って自殺する。ところが岩手県遠野市の類話では、結果が異なる。乞食になって廻り廻ってきた前夫に女は米を三升やり、なくなったら又来るように、と告げて帰す。男が次に再度女を訪れた時、女は夫に話して家の下男として使うことにする。乞食となった前夫は、以前別れた女房とは知らず、喜んで炭焼長者のもとで一生を送ったという。河合隼雄は遠野市の類話の結末について次のように説明している。女性の意識は男性のそれのように、悪しきものを切断し排除することよりは、取り入れることに特徴がある、従って女は一度切断し、排除した関係を何らかの方法で修復しようとしている。それは弱いものや悪をさえ受入れることによって、たえず全体性を志向しようとするものであろう、と。母性はもともと「包含する」という機能において特に優れていたのである。

さて「炭焼長者」の昔話を、（一人の）女性の心の中の出来事として分析することもできる。つまり女は、はじめ竹一本の位の男（男性機能）の低い部分を受入れることができなかった。しかし女は男（男性機能）との直接的な対峙を避け、本能の声を聞く（自然に耳を傾ける）ことによって、男（男性機能）の別の側面（黄金の部分）を発見し、出会うことができたともいえる。しかもその後、竹一本の位のもとの男を受入れるという類話が存在している。それは、男（男性機能）の黄金の一部

分だけでなく、低い部分も含めてまるごと受容できたということであろうか、しかもまわり道をしてはじめてそれが可能になるのである。

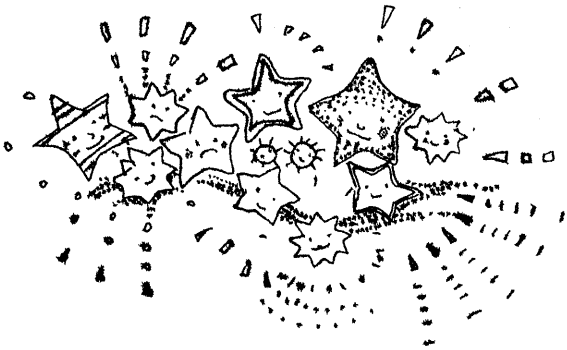
このように解釈した時、まさに女性性の凄さに驚かされる。女性性が持つ、本来すべてを包含する絶大なエネルギーが、秩序と方向性を伴なって全体性を志向した姿、それが炭焼長者の女房にあらわされている。女房は、女性性の発展と同時に男性機能の統合をも果たし、自由にはばたく女性へと心の成長をとげ、そのしなやかな姿をわれわれの前にあらわしてくれたのである。

4　結　論

結婚は個性化（自己実現）に至る一つの道程である。何故ならグッゲンビュール＝クレイグによると、個性化は男性対女性という対極性の中でより多く実現されるものであるという。本稿は昔話の中で、結婚における女性の個性化がどのように語られているか、その心の内的成長過程に焦点をあてて考察しようとしたものである。

女性が心の成長、それも精神性の高い成長を遂げるには、母性の発展と男性機能の統合が必要とされる。河合隼雄によると、両者は一見敵対する如く見えながら、実は相補的な関係を形づくるものであるという。つまり男性機能に鍛えられない母性はあまりにも泥くさく、逆に母性によって支えられない男性機能は、あまりにも冷たすぎるのである。ここにいう母性（母性原理）とは、「包含する」機能を中核にして、肯定的な面においては生み育てるものであり、否定的には呑み込み、しがみつき、死に到らしめる面がある。これに対して男性機能は（父性原理）、「切断」する機能にその特性がある。それはすべてのものを切断し、分析分割するものである。又主体と客体、善と悪、上と下などに分類し、母性がすべての子どもを平等に扱うのに対して、子どもをその能力や個性に応じて類別する。男性機能はこのように強いものをつくりあげてゆく建設的な面と、逆に切断の力が強すぎて破壊に到る両面をそなえている。

結婚において女性の個性化、あるいは内的な心の成長



が実現していくには、とくに上述の母性機能と男性機能の両者をどのように統合していくかが重要となる。しかも女性のばあいその統合の基本に流れるものは、すべてのものの「受容」という行為であるように思われる。ノイマンによれば、「女性が竜と戦っている魅惑的な姿をわれわれは想像することができない。竜をやっつける女性のやり方というのは、竜を受入れることである」という。竜をさえ受入れる程の器が、女性の個性化の過程で明確になってくるということであろうか。

さて、「鶴女房」と「天人女房」の昔話において、献身する女、耐える女としてすべてを受入れることによって、まず母性の開発と発展がはかられた。ところが既述した如く、母性が何もかも受け入れ、容れ込み、その内容物に秩序も方向性もない時、女性のエネルギーは絶大でたくましいが、昇華されることなく、心の中において混沌の状況にある。この混沌の状況にあるエネルギーが、「天人女房」において秩序と方向性を持ち、男性機能統合の第一段階の仕事がなかば成し遂げられた。しかし母性により確かな秩序と方向性が与えられるには、「炭焼長者」まで待たねばならない。

具体的には母性の発展と男性機能の統合が、日本の昔話においてどのように語られているか、本稿の分析考察の結果を要約したい。

(1) 「鶴女房」においては、男に献身的につくす女が語られる。女は自ら望んで戸棚の中へ入り、食事もとらずに機織りに精出す。機織りに三年もかかったと語られる昔話もある。しかも女は自分の羽毛を抜いて、文字通り身を削る思いで男に尽くすべく働く。一方欲深くなった男は、女が尽くせば尽くすほど女の思いからは遠い存在になるばかりであった。男は女との固い約束を破って、女の真の姿である裸の鶴を見てしまう。はからずもお互いの真の姿を見たために、女は死に至る程の衝撃を抱いたであろう。とうとう女は男性機能を位置づけることができず、傷ついたまゝいったんは男のもとを立ち去らねばならなかった。

(2) 傷ついて男のもとを去った女は、「天人女房」において天女として、再び男の前にその姿を現した。女は羽衣である飛び衣を男にとりあげられ、やむなく男と結婚し、子どももできた、七年の歳月、女は一度手にした自我の動きをとめて、家庭の中で耐える女となる。ところが丁度七年目、飛び衣をみつけ、女は男のもとから飛び立ってしまう。

「鶴女房」と「天人女房」の相違は、これ以降の展開にある。つまり前者では女の献身と努力に対応する男の変容がなく、女は黙って男のもとを立ち去った。ところが後者では男が忍耐と努力の末、立ち去った女を追って天を訪れ、変容の道を歩む。また「天人女房」で語られる男を女性の心の中の男性像と読み解くと、山を伐り拓き、種を蒔きとり入れる仕事は、まさに女性にとっての男性機能統合過程の仕事ともとらえられる。

さて「天人女房」では、男の変容または女の男性機能統合のための仕事がなされたにも拘らず、最後のところで失敗してしまう。真の変容と統合が可能になるのは、「炭焼長者」まで待たねばならなかった。

(3) 「炭焼長者」では最初女は、父親の定めた結婚に従順であった。又女は結婚後も位の違う男によくつかえ、男の我儘にもよく耐えたであろう。ここまでの女は「鶴女房」や「天人女房」に共通する、運命を受入れ、相手に尽くして耐えるという、運命に極めて受動的な姿で語

られる。ところが男の理不尽なわがまゝが続いた時、女は決然と男のもとを去る。ここで女は極めて能動的な、まさに「意志する女性」へと変貌していく。しかも男と別れた後の女の活躍にはめざましいものがある。炭焼五郎という男の存在を知り、訪ねて結婚を申し込み、男の家の炭かまどにあったたくさんの黄金をも発見する。それのみにとどまらず、最後には女は以前に切断・排除した前夫をも自分の圏内へとり入れ位置づけてしまう。これはまさにユングのいう全体性への志向ともいえるものであろう。

さて離婚、家出以降の女の能動性は、男性のそれとは異なり極めて女性的、母性的ともいえる特徴を持つ。つまり自我を前面に出して主張する能動性ではなく、相手の潜在能力を発見してひき出すという意味での受身のそれである。相手の個性化（自己実現）の援助を通して、結果として自己の個性化を達成するあり方でもある。このように女性の個性化は、必ず「受容」を基本とするため、現象的には受身の形をとる。しかしこの女性の姿は、決して単なる字義通りの受身にとどまらず、受動も能動も含み、ある時には極めて意志的でさえあるといえよう。

「炭焼長者」の女房に到ってようやく母性（女性性）の発展と同時に男性機能の統合も可能となったわけである。炭焼五郎の女房は、「受容」の姿勢をどこまでも持ち続けながら、能動も受動も必要に応じて自己の中に位置づけられ、かつそれにとらわれない、しなやかな女性へと心の成長を遂げた姿をあらわしたものであろう。筆者はここでの女の姿こそ極めて女性的な心の成長を遂げた、女性の個性化（自己実現）への姿ととらえるものである。

Ⅳ　おわりに

筆者が本稿で試みたのは、「結婚」を通して実現される女性の心の内的成長過程を明らかにすることであった。その主題化の動機については序論で述べた通りであるが、さらにいま一つ、本稿が筆者自身にとってもつ主

体的意味についても言及しておきたい。そのことは、人間研究が単に知的・客観的・科学的解明にとどまらず、同時に研究主体自身によって主体的・共感的に生きられる側面からの接近が重要な意味を持つからである。特にユングの分析心理学では後者の側面が大切にされる。

では本稿のばあい、「結婚」が主題化されたことの主体的意味は何か。それは筆者自身がユングがいう人生の後半期（四〇歳前後）に立ち至り、その転換期に固有の内的・外的危機を迎えたことに起因している。

筆者はこの期、その内的・外的危機と向きあい、長い時間の経過を待ってはじめて、結果としてそれらを受容すること、又それが意味することを学ぶことができた。それは「結婚」における、まさに女性的なあり方を通してといえる。「受容」するということは、極めてあたりまえの平凡なことがらでありながら、同時に極めて奥深い意味をもつものでもある。

いっぽうこのことは、一度「灯をかかげた女性」（自我確立の問題に目覚めた女性）にとって、自ら死にゆく程の苦しみをも要求する。この苦しみは、グッゲンビュール＝クレイグのいう「個性化に伴なう自己放棄的犠牲の要求」の故でもある。しかし個性化は、決して個人主義的、利己主義的ではありえないという。周囲の人間を犠牲にして、ただひとりだけに都合の良い利己的な個性化などないといえよう。個性化はまわり道のようではあっても、自己をとりまくすべてが、「ともに救済に向かって働く」ことの中にこそ実現される。

昔話が語る「結婚」における女性の内的な成長は、（「鶴女房」から「天人女房」、さらには「炭焼女房」へのしなやかな成長）この自己放棄的犠牲を通過してはじめて獲得されたものでもあった。

――完――

（福山短期大学）